

アイスランドの図書館教育

Education for Librarianship in Iceland

岡澤和世*

Kazuyo OKAZAWA

Abstract

Iceland is an island in the North Atlantic Ocean and its closest neighbour is Greenland, 200 miles to the west. The island is placed between Europe (the Old World) and America (the New World). This fact is symbolic for the ways in which Iceland thinks as a country. Prof. Sigrún Klara Hannesdóttir does such a analysis.

The country is inhabited by a very homogenous group of people, united in having a common culture background and a language not spoken anywhere else in the world. It is of interest to explain how a country with such a small population tries to cope with the information society.

How can people be trained for work in the information society in the country where the information flow will obviously be only to be small extent in the mother tongue? This paper's aim is to explain the development and organisation of library education in Iceland to compare it with a Nordic library education.

* 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科

Department of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University
JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 15, p. 17-30 (2001)

2001年8月11日、スウェーデンのアーランダ空港からわずか3時間の飛行後、アイスランドのレイキャビック空港に到着した。今回私がアイスランドを訪れたのは、これまで北欧諸国の図書館教育を言及してきたが、北欧諸国の一つであるアイスランドを除いてきたことが以前からずっと気になっていたからである^{1), 2), 3)}。着陸間際の飛行機の窓から見る下界の風景は想像を絶していた。そこはまるで月面のように見渡すかぎり茶褐色の岩石の平原だった。木一本生えていない。周辺に人家は見えない。わずかな緑は苔だと後で分かった。この小さい島国がどうしてインターネット普及率世界第4位⁴⁾になり得たのか。このどこの国とも違う下界の光景の最初の強烈な印象と後から後から沸き上がる興味がわずかな逗留の間ずっとついて回り、多くの疑問を投げ掛け続けた。

アイスランドは北大西洋に浮かぶ人口わずか29万人の小さな島国である。隣国は200マイル先のグリーンランドである⁵⁾。日本ではアイスランドのことを知る人は少ない。旅行ガイドブックにも載っていないことが多い。国土の真ん中に地球の割れ目が走り、今も両側に約1センチずつ移動している。この感動はその場に立って実際にそれを目撃しなければ分からない。それはユーラシアプレートとアメリカプレートに同時に足を掛けていることを意味する。実際、車で移動すると大陸のプレート移動説が現実のものとして迫ってくる。日本に輸出されている豊富な海産物、哀愁に満ちたサガやエッダ、火山の国らしく数多くの間欠泉にブルーダグーンを代表例とする多くの温泉。国旗に象徴される通り青い空と白い雪の交差する接点に赤い火山帯が走る。

アイスランドの教育を語るとき、この島がヨーロッパ(古い世界)とアメリカ(新しい世界)の丁度中央にあるということが重要だとアイスランド大学のAuður Hauksdóttir教授は話してくれた⁶⁾。そこでまず図書館教育について論ずる前に、この国の歴史的・文化的背景を簡単

に説明しておくほうがこの国の教育システムを知る上で有効かもしれない⁷⁾。

1. アイスランドの歴史的・文化的背景

アイスランドは東西からの新しい発想を常に柔軟に取り込み、対応し、発展してきた国だと国際交流センター所長のÚlfar Bragason教授はいう⁸⁾。この国は他の北欧諸国とは異なる独特の歴史と言語を持つ。国民の多くは同族の人々から構成され、共通の文化的背景が強い絆となっており、世界のどこも話さない独特の言語を話す⁹⁾。これがグローバル社会、情報社会の大きな波にどう対応していくのか、興味は尽きない。

この国の歴史は1000ADから始まり、その後のノルウェー、デンマークによる植民地時代も含めて“Book of Settlement”に詳細に記録されている⁹⁾。このように一国の歴史が起源から今日まで完全な形で記録され、残っているということは世界でも極めて珍しい。アイスランド語は“Iceland Saga”と呼ばれ、ここで使われている語が今もそのまま使われている。もう一つ、この国を語る時き決まって挙げられるのは世界最古のの現代議会アルシングの発祥地だということである(930AD)⁹⁾。議会が開かれたピングスヴェイルには今でも一年に一度全国から国民が集まり、1000年前を偲び、独立を祝うという。その岩だらけの場所に立つと、なぜこの荒涼とした地に人々が集まったのか不思議な気がする。その後ノルウェーとデンマークに支配され、デンマーク語の使用が支配階級で義務づけられたが、一般国民はこれに強く反発し、自国語を使い続けたという⁶⁾。1944年6月17日デンマークからの独立を勝ち取り、それを機に国全体が大きく変わっていく⁹⁾。

人口はわずか29万人しかいないが決して大国に負けない豊かな文化があると彼らは胸を張る⁶⁾。人口密度は1平方キロメートルに2~3人。しかし経済は常に高度成長国の一つ。平均所得も高く暮らしも豊か。天然資源は乏しいが、島の回りには豊富な海産物が捕れ、島中に豊富

な熱水と冷水が沸き出し、電力として利用される⁹⁾。小さい島に住んでいても世界のどの大国の生活水準にも引けをとらないと彼らは信じている⁹⁾。しかしこの高い水準に達するために支払った努力はおそらく並大抵のものではなかったろう。アイスランドの古いフォークソングの中には乏しい資源を守り、互いに協力しあう大切さと厳しい生活の様子が歌われている。島を取り囲む海は富みをもたらすとともに、人々を脅かす存在である (ISLANDSKLUKKUR)¹⁰⁾。

2. アイスランドの教育システム

アイスランドの初等・中等教育の教育はすべて母国語で行われる。これは世界の他のどこの国とも情報を交換し合う手段が全く無いことを意味する⁹⁾。それを避けるために中学校の補助教材として外国語が採用される。しかし、大学では母国語だけでは教育そのものが成り立たないため外国語が多用される。図書館には実に豊富な言語の書籍が並んでいる。しかし、入手した大学講義要項では母国語が圧倒的に多い¹¹⁾。マーケットも小さいし、翻訳書の数にも限界があると Hauksdóttir 教授は指摘する⁹⁾。しかし一人当たりの出版点数は極めて高く、読書量も多い。彼女の話ではアイスランド人はよく次のような質問をするという。「これはどんな役に立つ?」、「これは何に使える?」、「何がわれわれにとって使えない?」。彼らは外から入ってくる多くの情報を無批判に受け入れ、家に持って帰り、いろいろ工夫して、より良いものを作り出す。彼女の娘の Kristjana (現在一橋大学院の国費留学生) はその巧妙さが日本人と良く似ているという。桜と富士山の好きなこの母娘は大変な親日家である。ここには島国にありがちな孤立感・閉塞感が全くない。むしろその逆で東西の最高のものを貪欲に取り込む姿勢がアイスランドの根幹になって今の発展を支えているのだろう。この精神を培う風土が北欧諸国にあって、むしろアメリカに近い感じを旅行者に与えているのかもしれない。しかし人口が少な

い上に、首都レイキャビックとその周辺に人口の2分の1が集中しているという現状は、それ故の問題を多く生み出している。創意工夫がなければ教育システムそのものが危うい。次に紹介する図書館員のための教育にもこの精神と工夫が至る所に生かされている。それは世界の最高レベルの図書館学教育と比較しても決して見劣りしない優れた大学教育システムである¹²⁾。

3. アイスランドの高等教育

この国の高等教育と専門員訓練は19世紀中頃まですべて国外で行われた。主にデンマークのコペンハーゲン大学。国立図書館が1818年創立。1847年に初めての専門教育が開校。まず技術(1847年)、医学(1876年)、法学(1908年)の大学が作られた。1911年にこの3校が合併し、アイスランド大学になり、哲学学部と芸術学部が加わった。1940年に独自の校舎が出来、1941年に大学図書館が開館し、44年に工学部、69年に歯学部、76年に社会科学部が授業を開始した。卒業学位はB. A. レベルで、在学年数は3～4年。さらに上を目指す者は島を出て世界中の大学に留学した¹³⁾。しかし必ず島に戻り国の発展に寄与してきたという。帰国しても就職機会が少ないにも拘らず、彼らが島に戻るのは自国への強いアイデンティティのせいだと Hauksdóttir 教授は言う⁹⁾。

アイスランド大学は国で唯一の総合大学で、現在5～6000人の学生が学んでいる。その他の教育機関として、教員専門学校、農業専門学校、Akureyri 大学などがあるが、数は少ない。

4. 図書館教育

アイスランドの図書館員教育・訓練はアイスランド大学でのみ行われる。所属は社会科学部。この学部には図書館情報学の他に政治学、心理学、社会学、文化人類学などが含まれている¹¹⁾。第一号専門図書館員はデンマークで司書訓練を受けた Sigurgeir Fridriksson であった¹⁴⁾。彼は

帰国後、レイキャビック公立図書館の初代館長となり、デンマーク方式を取り入れた。分類法もデューイ十進分類法をアイスランドに合うように改良して使った。彼がこの分類法を母国に持ち込んだ頃、もう一人の図書館員、Jon ÓlafssonはシカゴのNewberry Libraryで図書館員として働いていた。彼は1899年に帰国し、国立図書館の目録作成に携わり、アメリカ方式を導入した¹⁴⁾。しかし大学図書館と公立図書館との間には明確な区別があったためにその後の電算化のような共同作業の弊害になり、図書館システムの自動化の遅れの原因になったと大学図書館内を案内してくれた図書館員は指摘した。アイスランド大学で図書館教育が正式に始まったのは1956年からである¹⁵⁾。大学図書館員であったDr. Bjorn Sigfussonが教授に昇格され、多くの図書館員の励みとなった。当時の図書館教育の主な目的は国立図書館と大学図書館の職員を養成することであった。この様な機関で働く図書館員がアイスランドの知識を持っていることが論理的に必要であると考えられた。そのため学生の希望によって講義の内容は異なっていた。強調は分類、目録、書誌、古文書読みと実習であった。実習は大学の図書館で数週間行われた¹⁶⁾。

図書館学の講座はもともと哲学学部の教員が兼任で教えていた。それがやっと1964年に初めて独立した学科になった。しかし、主専攻で図書館学を卒業した女子学生がやっと一人誕生する程度で主専攻で図書館学を選ぶ学生は非常に少なかった。

図書館学教育の最初の見直し改革が1960～1970年に行われ、内容も大きく変わった。アイスランド大学で図書館学を学び、国外に留学していた学生が学位を持って戻ってきたからである。1973年にはthe Association of Professional Librarianが創設され、アイスランドの図書館教育の改革が始まった。そのために、2人の外国人専門家がわざわざロンドンとデンバーから招聘され、1975年、初代の専任助教授が任命された。これが現在アイスランド大学の図書館情

報学科主任教授、Sigrún Klara Hannesdóttir女史である。また、USAの図書館で働いている本国出身の図書館員からも広く改革案を求め、アイスランドの図書館教育の将来のマッピングが徐々に出来上がっていった。しかし、改革案は提起されたが、講義内容の主導権は依然として大学図書館が握っていた。

1979年に社会科学部が新設されたのを機に、哲学学部から心理学、教育学、図書館学が社会科学部に移った。社会科学部には既に社会学、政治学、文化人類学があった¹⁷⁾。

図書館学は哲学学部に残るべきか、それとも新設学部に移るべきかを巡って委員会が作られ、検討が重ねられた。この時の委員会の構成員は学生局の選んだ3人の学生、教員3人（2人は専任、一人は非常勤）であった。この委員会では現在行われている講義の適切さ、単位の互換性、廃止すべき科目などの問題点が議論され、その最終案が教授会に提出され、審議された¹⁸⁾。

これと平行して、社会科学部の新設計画時点で、アイスランドの図書館で働くすべての図書館員に対して彼らの意見を聞くための実態調査が行われた。

こうした一連の作業は北欧諸国では決して珍しいものではない。これはレスミ制度と呼ばれ、意見調達・合意形成技法として広く知られている¹⁹⁾。委員会は付託された案件について論点を調査・審議して、最終報告書を纏め、本会議に送付する。その活動は詳細かつ徹底的であるという。この制度はその案件に関係するあらゆる利益団体、行政機関を対象に施行されるのが普通であるが、アイスランドはこれを教育機関にも適用している好例といえよう。こんな一つの学科の方向を決める決議にも小さい国ならではの創意工夫がなされ、国民参加型の民主主義精神が生かされている。

図書館学は今のまま、哲学学部に残るべきか、それとも新しくできる予定の社会科学部に移るべきかの調査の結果、図書館学は歴史や哲学よ

りも社会科学に近い学問であるから新設学部に移るべきだという結論に達した。また、心理学や教育学は図書館学により近い学問領域であり、同じ学部にいることによって互いに良い影響を与え合うというメリットがある。この決定はその後の図書館学講義内容に大きな影響を及ぼしていく。現在、社会科学部はアイスランド大学の学部の中でも最大学部である。それに伴って図書館情報学科も大きく発展していった¹¹⁾。

当時の大きな変化は図書館学教育が新しい時代に入ったことを反映している。教員数も増加し、幾つかの新設講座も加わった。図書館自動化のコースのために外国から客員教授が招かれ、指導に当たった。また、社会科学部の一学科である管理・運営学科と連携して大学図書館サービスが行われた。こうして、図書館情報学が一つのアカデミックな学問として承認され、専任教授が授業の指導権を持つことができるようになった。

5. アイスランドの研究環境

1985年 the Social Science Institute (SSI, Felogsvinindastofnun) が社会科学部で活動を開始し、1986年に the Library Information Research Centre が S S I の一つの機関として創設された。これを記念して2つの書誌が刊行された。一つはアイスランドの老人学、もう一つはアイスランドの切手収集と郵便史であった。しかし、その後は資金不足のためセンターは名ばかりのものになった¹²⁾。

アイスランド大学への入学資格はセカンダリー・スクールからの推薦状と入学試験である¹³⁾。大学への入学学生の年齢は14年制(初中高校)を卒業した19~20才で、大学側は医学、歯学、生理学、ジャーナリズム以外の分野は全員受け入れる義務があった。

図書館情報学科の志願者数はここ15年間、25人~30人ではほぼ一定している。創設された1964年は一人、65年、66年0人の時もあった。卒業生の数は10~15人。学生のほとんどが女性。男

子学生は約10%程度。卒業後の就職率は極めて高い。彼らのほとんどが卒業時には既に図書館への就職が決定している。専門図書館員が現在300人働いているが全員この学科の卒業生である¹⁴⁾。また、修士、博士の学位を取得するために国外に出る者もいる。しかし、現在図書館学のPh. Dを持っている者は国内に1人しかない¹⁵⁾。

1984年、主専攻で図書館学を修了した学生を専門図書館員として国が認定した。これによって卒業生の就職機会はさらに拡大した¹⁶⁾。

現在の図書館情報学科の専任スタッフは4人。2人の教授、Dr. Sigrún Klara Hannesdóttir と Dr. Anne Clyde と2人の助教授、それに数名の非常勤講師がいる。教員資格として最低修士号までが必要であるが、アイスランドには図書館学の大学院がないために外国で学位を取った人たちである。主に米国、英国、オーストラリア、カナダ、ハンガリー。

6. 図書館情報学科のプログラム

図書館情報学科の講義の主眼はすべての図書館タイプに対応できる共通の業務を教えることにある。コア・コースは the Study Committee が決定する。開講年によって多少の違いはあるが、基礎科目はほとんど変わらない。コア・コースの数は受講する学生がどのレベルを選ぶかによって異なる。主専攻なら90単位(一単位は一週間1回の前期出席時間で計算)、副専攻なら30単位。基礎科目は全学共通科目。これをすべて履修し終わった者だけが専門コースに進める。一週間に受講できる授業数は学部によって異なるが、学科ごとに上限が決まっている。図書館情報学科の場合3年で卒業するためには一週間で15時間以上を取らなければならない。その上多くの課題が課せられる。そのため、すべての科目を3年以内に履修し終わることはかなり難しい。専門図書館員の資格を取りたい場合は60~90単位を取らなければならない。さらに司書教員の免許(diploma)を取りたい場合は図書

館学課程修了後一年間の副科目を取らなければならない。これを受講できるのは既に教員資格を持っている学生に限る。B. A. 学位は3年で授与される¹³⁾。図書館情報学科が提供しているコース数は40科目である¹⁴⁾。

学生が一年間で受講できる授業出席の上限は選択コースによっても異なる。図書館学の場合は週15時間取れるけれども、実際は1科目を完璧に修了するには相当量の努力が求められる¹⁵⁾。指定図書の問題も多く、大変だというのが学生からよく聞く苦情である。

7. 図書館学講座の見直し(1990年代)

1993年、アイスランド大学の図書館学科が図書館学講座の見直しを迫られたのは国際変化の波が押し寄せ、従来の講義内容では時代の要請に対応できないと判断したからであった¹⁶⁾。特に次の2点が議論の対象となった。(1)コース間に重複している部分はないか、(2)講義内容にもっと理論を導入する必要はないか。この講座見直しの当面の目的は(a)次の2～5年間の図書館学の方向性を示す政策を作ること、(b)各年ごとの学習目標を確立すること、(c)この目標に沿って授業内容を決定すること、(d)理論と実践の適切なバランスを確立し、これらの当面の目標に適合するコースを開発すること¹⁷⁾。

この再編成のための委員会が設置され、この4つの目標を達成するための勧告が議論された。3人の委員(1人は図書館学教授、1人は専門図書館員協会からの代表、1人は学生代表)がまず自分の属する大学、協会、学生自治会のメンバーと議論し、そこで決まった案を委員会に提案する。このとき共通して最も関心を集めた議論は「すべての図書館員にとって特に重要な能力は何か」であった¹⁸⁾。

1994年早々に社会科学部教授会は図書館学科から提出された新プログラムを承認した。この再編成によって在学生在が不利にならないように、個人的にカンセラーが行われ、全員無事卒業できるように努めた¹⁹⁾。

新しい改正案は直ちに実行に移され、翌年には前年の評価を行うという地道な努力が繰り返され、その結果、さらに充実したプログラムが出来上がっていった。実際には学科内部ではかなりの抵抗や反発、論争があったらしいが、概ね、学生たちはこの変化をむしろ歓迎し、進んで新プログラムを採択した。改正された図書館情報学プログラムは以下の通りであった¹⁹⁾。

<コア・コース(単位数)一年目>

- * 図書館と社会 (3)
- * 目録 (4)
- * 分類 (4)
- * 情報サービス (3)
- * 情報源 I, II (6)
- * 研究法 I (4)
- * 実習 (2週間) (2)

合計単位数-26単位はコア・コースから、4単位は選択から

<2年目-コア・コース>

- * 索引作成 (3)
- * 図書館の仕組みとサービス (3)
- * 研究法 II (4)
- * 実習 (1週間) (1)
- * B.A. プロジェクトまたは卒業論文 (6)

合計単位数-17単位はコア・コースから、13単位は選択から

<選択コース>

図書館でのコンピュータ (3); オンライン・サーチング (3); インターネット (2); データベース構築と開発 (3); 目録 II (3); 本の歴史 (3); 人文科学資料のレファレンス・ワーク (3); 科学資料のレファレンス・ワーク (3); 図書館史 (3); 図書館経営 (3); 児童文学 (3); 情報サービスのマーケティング (5); 障害者のための図書館サービス (3); 記録物管理 (5); 保存 (2); 公共図書館 (2); 学校図書館 (2); 専門図書館 (2); 国立図書館 (2); 大学図書館 (2); 医学図書館 (2); アート図書館 (2); 経済界への情報サービス

(2); 外国の図書館事情 (3); 図書館情報学リサーチ研究 (3); 図書館非関連研究 (3); アイスランド図書館研究 (3, 外国学生のためのコース); 図書館情報学リサーチと関連分野進学のための修士セミナー・コース (5)。

B. A. 学位を得るためには、全学生はB. A. 論文を書くか、なんらかのプロジェクトに参加しなければならない。論文およびプロジェクトのテーマはオリジナルなものに限られる。この論文の評価は専攻した分野で自分が提示した新しい考えがいかにアイスランドの環境に生かされ、国の要求に適應できるかに焦点が当てられる。この国では、大学卒業というだけで、卒業した分野に対してかなりの能力を持っていることを実証し、社会の期待に應えていかなければならない。

<社会科学部共通コース>

研究法のコースは社会科学部全学生の必修科目。このコースでは定質法、定量法が教授される。図書館学科の学生は基本的な研究法Ⅱの代わりにこれを受講することもできる。1年目は2, 3年目に比べて基本的なコースが多く、専門コースは2年目以降。1年目で学生が選択できる必修科目はインターネット。これは大学図書館で利用できる資料だけでなく国内外の多くの情報源にアクセス出来る方法を学生に教えておくことがその後の学習に役立つと考えているからである。図書館学専攻の学生は他分野の知識をある程度持っていることが期待されている。そのためできるだけ他分野の選択科目を受講するように指導される。図書館学だけで3年間を過ごす予定の学生に対しても同じようなアドバイスが行われる。他分野からの20単位は図書館学科の単位として認められる。このように各学科の講義が他の学科でも受講でき、単位として認められる制度は社会科学部全体の教育システムの方針となっている。これは長所でもあり、短所でもある。良い点は学生が図書館教育の助けとなる豊富な知識を得ることができること、他学部、他学科の学生と交流する機会が増える

こと。それは大学全体の組織の理解にも繋がる。問題点は実習を行う時間が正規の授業時間内になかなか見付けられないことである。そのため、実習費用がかなりかさむ。

このような問題点もあるが、図書館学の講義は理論と実践のバランスを旨く保っている。こうした努力のおかげで大学内にあって図書館学は“full academic subject”であるとして高い評価を得ている¹⁰⁾。

実習は3週間、3つの図書館で行われる。学生はこの実習の期間中に図書館の実際の仕事や運営についての詳しい知識と技法を習得する。これが将来の就職先になることが多い。現在、もっと実習時間を増やして欲しいという要望が多い。特に図書館の機械化を学んだ学生から実習期間中、現場の図書館員が学ぶ機会が得られるというのがその理由である。卒業生はあらゆるタイプの図書館および情報センターで採用される。情報サービスなどのような新しいコースの卒業生はビジネス界へ進出している。中でも記録物管理のスペシャリスト・コースはいつも人気が高い。その要請を受けてコースはインターネット、オンライン・サーチングのコースを新しい仕事にも適用できるようにレベル・アップしている¹¹⁾。これは図書館中に溢れるほどある端末の前にいる学生の多さからも窺える。

<特別講座>¹¹⁾

図書館学科が特別利益団体に提供している講座は3つ。(a)学校図書館員のための講座(司書教員)、(b)記録物管理専門家養成講座、(c)外国人のための英語による講座。これらはすべて1年で終了。

(a)学校図書館員講座(1979年設置)

学校図書館員として働きたい教員のための専門員訓練コース。はじめは正規の学科内の講義であったものをこのグループの要請に合うように再編成したもの。このコースを受講する者は以下の科目を30単位以上取らなければならない。

図書館と社会(3単位); 情報サービス(3); 情報源(3); 学校図書館の運営(5); 児童文

学(3);実習(学校図書館で3週間,2)。20単位は必修,10単位は選択科目で修得。ここでは目録・分類の科目が除かれている。これに教員資格取得に必要な科目が加わると取得する科目が多すぎるという配慮がなされているためである。この他にもいろいろな工夫が行われている。

この大学が提供する学校図書館員のための講座は the Icelandic Union of Teachers からの援助をほとんど期待できない。The Teachers Training College で教えられる学校図書館員の講座はこれとはまったく違っており、デンマーク方式。そのため大学でわざわざこの特別講座を設けることに対する反論はあるが、それでも必要だと Hannesdóttir 教授は言う。その理由の一つは財政的問題。もう一つは学生の要求を柔軟に吸収できる講座が大学があれば広く多様なコースを受講者が選べるからである。これは教員にとっても有利である。図書館課程終了後一年で両方の資格が取れるからである。教員免許の他に司書教員の資格が取れる。主な問題点は教員としての実習現場を経験していない点である。その代わり司書教員資格を持った者は広い情報の世界を持ち、情報という視点から世界を見ることが出来る。今のところ、この2つの機関の歩み寄りを実現していない。

(b)記録物管理専門家養成講座(1988年設立)

この科目はアーカイブからビジネス・レコードを含む多様な記録物の管理を教える講座で主に現場からの実務者が担当する。もともとは本以外の資料についての情報を求める多くの専門図書館員からの強い要望から開設された。アーカイバル・スタディーは哲学学部の歴史学科の中で単発的に教えられていた。そのため数世紀前の手書き原稿を読むこと、解釈することに重点が置かれていた。現在ではこれを他のコースと組み合わせて、専門図書館員の特別コースとして独立させている。この資格認定には30単位が必要である。

記録物管理(5単位);目録(4);分類(4);

索引(3);情報サービス(3);図書館経営(3);保存(3);目録Ⅱ(3);非関連科目(3);実習(3)公文書か専門・研究図書館で3週間。

このコースの受講生は必修科目で26単位が必要。

(c)英語による図書館情報学研究¹⁸⁾

これは外国人のために英語で講義が行われる特別講座である。この講座の受講生はアイスランド語を知らなくても受講できる。このコースの目的は、国際的なデータベースにアクセスできるように指導すること、大校内の設備を十分使いこなせるようにすること。教員はすべて英語が堪能で誰でも担当できる。自国の学生も受講できる。

<秋学期(Autumn Semester)>

図書館情報学のためのインターネット(3)
指導:Dr. Anne Clyde;図書館情報学リサーチ(3);アイスランドの図書館(3);非関連科目スタディー・プロジェクト(春学期も開講);アイスランド図書館での実習(3);選択・読書コース(3)

<春学期(Spring Semester)>

情報源Ⅱ(3);コンピュータと図書館(3);図書館経営(3);アイスランドの図書館(3);非関連スタディー・プロジェクト(3);選択・読書コース(3)。

2001年度では秋学期に「図書館情報学のためのインターネット」,「リサーチのためのインターネット」,春学期には「コンピュータと図書館」,「情報源Ⅱ」,「アイスランドの図書館」を開講。指導は学科の教員が持ち回りで担当。

このようにアイスランド大学の図書館情報学科は多彩な特別講座を学生に提供し、いろいろな方法を組み合わせることによって極めて高い柔軟性を保っている。このような広い多様なコースを維持することによって、学科独自の特異性を打ち出し、学生一人一人の満足度を高める工夫が随所に見られる。当然、教える教師の数に限界があるが、外部から豊富な人材を求め、常

設させる工夫を懸命に模索している姿は賞賛に値する。例えば、記録物管理専門員養成講座が特定の年にしか開講できない時などは、現場の専門図書館員にその旨を通告して講師を現場から派遣してもらうのだと主任教授が話してくれた⁸⁾。

＜生涯教育＞¹⁰⁾

アイスランド大学ではすべての学部が独自の the Institute for Continuing Education を持っている。これと各専門機関と団体が協力し合っ て公開講座を開いている。

専門図書館員のためのコースが現在5～6つ 毎年開講される。新しい講座を開講するときは 客員研究員によって行われることが多いが、い ないときは通常のコースの担当者がその講師を 勤める。この様に図書館学講座は常に新しい風 を取り入れ、現場の人々が孤立しないように、 新しい技術から取り残されないように緊密な関 係を保つように努力している。今最も人気のある コースはインターネットコースで様々の分野 の学者から学生まで、子供から年寄りまでが楽 しそうに学んでいる。教えるのは学科のスタッ フや学生。これは他学部にも開講されている。

8. 図書館学情報学講座と国際化の波

アイスランド大学図書館情報学科は常に外国 からの情報を柔軟に取り入れ良い関係を保って きたと、Hannesdóttir 教授は強調する¹³⁾。特に 生涯教育分野での北欧諸国との相互協力関係は 目覚ましい⁸⁾。現在、NORDPLUS プログラムの下で他のスカンディナビア国の図書館教育 に参加することも多い。この機会には学生たちが 新しい世界を知る助けとなり、その学生の見聞が 新しい発想を生み出すと、その大きな可能性に 図書館学教育の明日を見ている¹³⁾。またEU 加盟に伴って交換学生の枠がさらに広がった。 アイスランド大学は現在、早稲田大学と学術協 定を結んでいる。この様な他国との国際交流が アイスランドにとってどのくらい有益か測りし

れないと Hauksdóttir 教授はいう⁶⁾。バルト海 諸国はアイスランド大学に図書館学を学ぶ学生 を送ってきている¹⁷⁾。主な選択理由は英語で教 えるコースがあるからである。2001年現在、外 国留学生が10人在籍している。英語で講義され る一年間の講座はアイスランド大学の外国留 生にとってますます魅力的な教育システムになっ ている¹⁷⁾。

アイスランドの図書館教育システムは他の北 欧諸国のそれとは異なる。フィンランドはまた 独自の方式を持っている¹⁸⁾。それは図書館学教 育がアイスランド大学の開校以来ずっと大学の 学部の中で教えられてきた点である¹³⁾。スウェー デン¹⁹⁾、ノルウェー²⁰⁾、デンマーク²¹⁾の図書館学 は専門学校で教えられていてこれらは総合大学 ではない。大学で図書館情報学を学部から大学 院まで一貫して行っているのは北欧ではフィン ランドだけである¹⁹⁾。アイスランド大学が図書 館情報学科を大学の学部置く主な理由は歴史的 観点と論理的観点の両方から妥当と考えられた からである。まず歴史的理由として、図書館 教育がアイスランド大学で始まったとき、大学 図書館員がこのコースを教えることが適切と考 えられた。すでにこのような教育システムが出来 上がっているのにわざわざ図書館学校を作る ことは不経済という考えである。それに図書館 学は他の学部の学生に取っても情報を得る上で 基礎的な知識を教える適切な分野であると見な された。この事実を支えられて図書館学は専門 家を養成する場というより、広い一般的知識を 教育する学問領域という独立した学科として成 立した¹⁶⁾。こうして、図書館情報学科は社会科 学部の中の一つの学科として、一つの専門分野 として認めるべきであるという考えが定着した。 論理的な理由としては図書館学成立の歴史的 文脈に鑑みて図書館情報学講座を大学の確立され た組織の中に置くほうが経済的にも、構造的に も適切と判断されたからである¹³⁾。

大学のB. A. 学位を持った卒業生、または それに相当する学力を有すると認定された者は

学位を取るために外国に進学することが論理的と考えられた。主に米国、英国などの国で学位を取得し戻ってきた¹⁰⁾。デンマークに留学してもアイスランドでの学位以上は取れない。デンマークの図書館学校には修士を授与できる制度がない。スウェーデンではボロース図書館学校を卒業した学生で修士号を取りたい学生はイエテボリー大学の大学院に進学することができる。ノルウェーの場合はトロムソ大学が文献学部を1997年に作りここで修士号を授与する予定である¹¹⁾。アイスランド大学の図書館情報学科では大学で一貫して図書館情報学の学部、大学院を持つ国の大学院に留学するように指導する。その準備のための特別講座も設置されている¹²⁾。

なぜアイスランドの図書館教育が、近隣のスカンディナヴィア諸国よりも英語圏の国々から強い影響を受けたのか、その疑問にHannesdóttir教授は3つの理由を上げている¹³⁾。(1)一番最初に米国から修士号を持った大学院出の図書館員が来たこと。英国から来たのは極僅かで、学士の資格しか持っていなかった。(2)スカラシップの制度を利用して米国に留学した学生が多かったこと。(3)大学が1970年代、図書館学科の将来計画を立てたとき米国と英国から専門家を招いてアドバイスを受けたこと。

アイスランド大学は必修科目と選択科目の混成から成り立つコースをもとに教育システムモデルが作られている¹⁴⁾。これに秋と春の学期(semesters)がある。学生は自分の興味・関心に従って自分の教育計画を立てるが、相当の柔軟さが与えられる。大学の学部内外は単位互換制度があり、外国語のリーディングやスタディンクも単位として加算される。また、外国への留学を大学を上げて奨励する。これは大学院の教育を提供している大学への留学をし易くするためである。学生は外国の留学が就職の際、有利と考えているが現実はそのようとは限らない。国内には適切な修士課程がないために修士号を取りたい学生は外国に出るしかない。記録物管理スペシャリストになりたい者には国外の留学は

魅力的であるが、図書館学科の学生のほとんどが女性であるため長期留学は難しい。より高い学位を取るには相当の時間が掛かるし、費用もかかる¹⁵⁾。しかしこの国の女性はそれを跳ね除けて世界を目指す。アイスランドは世界で初の女性の大統領を選出した国である。フィンガボドッテル大統領は女性の社会参加のシンボルとして、世界の世論を賑わした。なぜこれが実現できたのかの問いに、Hauksdóttir教授は「そのためには父親にもっと娘と話す時間を持たせなさい。そして娘をどんなに愛し、どんなに期待しているかを娘に伝えなさい。それが女性の自立と社会参加を促進する大きな鍵となるでしょう」と話してくれた¹⁶⁾。それを実践するかのようにならぬ娘は今、一橋大学でPh. Dの論文に取り組んでいる。その後彼女は米国を目指す熱いまなざしで答えた。大学はこの女性たちの熱い期待に応えようとあらゆる努力を模索している。その一つが<図書館情報学における修士レベルの研究>という講座である。社会科学部は修士レベルの講座をいくつか設置し、研究(research)に重きを置くように努力している。図書館情報学科のスタッフはその計画段階から深く関わってきた。当時はいろいろな事情から図書館学卒業生が修士課程に進むことはほとんどなかった。この分野の研究者も少なく、現場の図書館員はリサーチに関心がなかった。外国人が研究のため訪島しても、まず難解なアイスランド語から学ばなければならない。研究書をはじめ、歴史的記録文献はすべてアイスランド語で書かれているからである。そのため外国人による研究例は全くない¹⁷⁾。これはアイスランドが抱える最大の問題であると関係者は口を揃えていう^{18), 19), 20)}。

9. 人口が少ない故に生じる難問

今回の逗留中、常に頭にあって離れなかった疑問「アイスランドのような小さい国がどうしてこれだけの大学図書館を持ち、大学教育の中でしっかりと図書館情報学を定着し得たのか」。

その答えの多くは既に述べたように工夫と努力の賜物という他ない。ここではそれ以外の問題について考えてみたい。その一つは、他国の教育システムに負けない講義内容を模索し、その質を保つという途方もなく遠大な挑戦にどう立ち向かってきたのか。もう一つはこの国で図書館学教育を受けた図書館員がこの国の図書館や情報産業関連企業での仕事にどう対処できているのか。大学図書館での研究者、医学図書館での医者、漁業関連企業での研究員、工業会社ではエンジニアといった現場で働く専門家の要求にどのように応えているのか^{7), 13)}。

大きな国ならば図書館以外にもそれぞれの利用者の多彩な要求にサービスできる機関が複数あり、さらにその専門家向けの図書館があるだろうが、アイスランドには国立大学が一枚しかない。ここがすべての専門家を育成し、専門家として社会に出す。また、大きな国なら教授陣も多く、もっと学生の多彩な要求に合った詳細な専門科目が多く用意され、質の維持にも競争原理が導入され、より良いものが生き残っていくだろう。これがアイスランドにはない。アイスランドではわずかな科目の中で図書館情報学のあらゆる局面をわずかなスタッフで教えなければならない。さらに国際化の急激な到来に対処するために新しい情報機器の使い方、新しい情報管理も教えなくてはならない¹⁴⁾。

これらアイスランド大学の図書館学科が抱える問題の解決策をHannesdóttir教授は3つ挙げている¹⁵⁾。(1)情報サービスを行う上で、社会で有効な役割を果たす図書館であり続ける上で、学生が必要な基本的な知識と技術(skill)を習得できるように、健全な基礎コース(sound basic courses)を提供できるように努める。(2)広範囲の多彩なコースを常に提供できるように努め、学生が他分野のコースも自由に選択できるように主・副専攻制度を導入し、一人一人の要求や希望を適えられるように他学部、他学科とも協力し合って、コースを組み合わせるように工夫している。これによって学生は他学

部、他学科、他大学の提供するコースを有効に使うことができ、単位互換制度のメリットを利用し、柔軟性の高い選択ができるように開拓されている。その結果、図書館情報学科内で外国語、研究法、方法理念(methodology philosophy)などを提供しなくても、その専門家のいる他学部、他学科のコースで専門知識を得ることができる。(3)外国からの専門家を優遇するように最大の努力を払っている。例えば学術協定校からの教員、フルブライトプロフェッサー、その他のエキスパートによる休暇を利用した短期授業の設定などである。これは言うまでもなく、学生が将来就くであろう専門職の助けになる。

以上のような努力の結果、アイスランド大学の図書館情報学科の講座はこの大学のどの学部の講座よりも国際的といえる。それは他の北欧諸国が行っている図書館教育のどれよりもはるかに国際的であった。今回アイスランド大学の国際交流センターを訪れたが、世界中の大学資料が揃っていた。国際交流センターには専任スタッフが5人もいて、全員が数か国語を話すとスタッフの一人、Óskar Eggert Óskarssonは流暢な英語で説明してくれた²⁰⁾。その後、訪れた大学図書館、国立図書館でも案内してくれた図書館員は分かりやすい英語でガイドしてくれた。また、資料提供にも快く応じてくれ、図書館員の誇りを感じた。こうしたHannesdóttir教授が指摘する解決策はいずれもアイスランド大学だけでは補充できない知識を国外から積極的に求め、外国からの研究者を優遇するという昔からの伝統があってはじめてできる政策であろうと強く感じた。

もう一つの質の管理(quality management)の問題にはどのように対処しているのだろうか。提供される講座数が少ないだけでなく、提供できる専門研究機関がこの国でたった一枚しかないとすれば、質の問題はそれだけで大問題になりうる。このような状況の下では、機関間の競争も評価基盤を提供できる専門家評価機会もないし、ポジション争いも、責任を共有しあう仲

間もない。何かが生じた時、それをモニターする公式の方法が皆無ということは質の維持にとって致命的なことだ、とアイスランド大学副学長、Guomundur 教授は指摘する²⁰⁾。彼によれば、図書館情報学科に限らず、質の問題は常にアイスランド大学の首位の論争点であるという。例えば理工学部では特にこの問題が深刻で常に教える講座の評価には大学を挙げて取り組むという。そのために国外から専門家を呼び入れる。このためにかかる費用の一部は the Iceland Association of Engineer が負担する。

しかし、図書館情報学のような小学科が講義の質を評価し、維持していくにはどんな基準が使えるだろうか。現在次の2つの方法が最も良く使われていると Hannesdóttir 教授はいう¹⁹⁾。(1)卒業生の市場適応度 (marketability), (2)外国に留学した時その国でどの程度うまく学生がやっていけるか。(1)に対しては、これまで、卒業生が国内の図書館や情報センターで職を得ることは簡単であった。学生の多くは在学中に既に図書館や専門情報センターで仕事をしてきた。(2)についても国外の学生からいまのところ外国の大学でも学業で困ったことがないという報告を得ている¹⁶⁾。

1994年、教育省がアイスランド国内の高等教育の質の評価に European Pilot Project への参加を要請してきた¹⁹⁾。このプロジェクトの目的はEUとEFTAに加盟しているすべての国からの46機関とその講座を対象に、高等教育の質の評価のガイドラインを作り、質の維持に努めることである。まず50頁前後の自己評価票の書き込みという自校評価を行い、次に審査グループ (peer group) を各国内から選出し、提出された評価レポートを審査し、対象機関の講座の調査のために大学や機関を訪問し、スタッフや学生とインタビューを行う。最後に国選委員が集まった情報と意見を纏め、包括的な報告書を準備し、参加国すべてにその報告書と現在行われている講義から得た経験を添えて配信する。その結果、アイスランド大学の図書館学科はあ

らゆる角度からの評価に対しても最新の講義を提供していると評価された¹⁹⁾。最初の自己評価報告書は1995年3月に作成された。これは提供しているすべての講座の全局面 (スタッフ、学生、経営、ファンド、設備など) を対象にした詳しい評価結果であった。ヨーロッパの様々な大国の図書館学校の講座の評価基準を小国のアイスランドが進んで受け入れ、評価に臨んだことにこの国の学問に対する自信と誇りが感じられて興味深い。どの大国と比しても決して劣らないという自信が今のアイスランド大学の図書館情報学教育の根幹にあることを強く感じた。

10. 今後の課題と将来の図書館教育

まず最大の課題は大学院を大学内部に設置することだろう。このためにまず学部レベルの図書館情報学科の講座を再編成すること。将来、それを望む学生も増え、より専門的な分野として発展していくためにはぜひこの教育システム制度の見直しが急務である。しかし、現実はこの国も日本と同様、学生数の確保が難しくなっている。今いる25~30人の学生はここ数年内で半数に落ち込むだろうと予想されている²⁰⁾。今後は図書館情報学を主専攻に学位を取ろうとする学生の確保も難しくなるだろう。これは国全体の図書館員も減ることを意味する。将来的には外国の大学と提携して修士課程を提供できるようにしたいと Hannesdóttir 教授はいう¹⁹⁾。今のスタッフ人数では修士課程の学生に十分な教育はできない。もしアイスランド大学の図書館情報学科に大学院ができれば学生は自国の図書館の現場で研究を行うことができるし、国外で学位を取るために留学することもなくなる。

以上、小国アイスランドの図書館教育について大まかに言及した。それは多くのスタッフを抱え、充実した設備を供えた大国の図書館学の講座と、評価と管理を機関内で共有し合える国の講座と比較しようにもできない条件が余りにも多かった。もし敢えてそれを行おうとすれば新たな評価基準を設けなければならないだろう。

それはその国の歴史や伝統から切り離されたものであってはならない。アイスランドはこの難問を豊富な経験と知恵から克服していた。それは見事という他ない。Úlfar Bragason 国際交流センター長は、「外国との交流関係を強化し、外国の専門家との関係を大切にしようとする気がアカデミック・スタッフにあればたやすいことだ」という⁸³⁾。そのとおりかもしれない。確かに国際的な影響力が様々な形でアイスランドの図書館教育の専門性を形成していた。外国の友人たちの交流がこの大学での図書館教育を支え、教育全体の向上に重要な役割を果たしてきたと彼らは外国から来たわれわれを労ってくれた。

図書館教育の見直しは今も継続的に行われている。図書館情報学分野は生きているから、コンスタントの見直しが必要であるとHannesdóttir教授はいう⁸⁴⁾。図書館学が社会の発展に寄与したいと思うなら、図書館学の講座は国の大小を問わず、それらを守ることよりも発展をリードするものでなくてはならない。単なるリメインではなく、プロアクション(proaction)でなければならない。将来の明確な構想を持って初めて世界中の専門家と有意義な交流を持て、意見の交換が可能になる⁸⁵⁾。それが小国アイスランドの図書館情報学教育を成功に導いた最高の秘訣かもしれない。

この論文の骨子はアイスランド大学訪問中時間を割いて会って下さった、図書館学科、国際交流センターのスタッフ、図書館員たちのインタビューを基に作成したものである。

引用文献

- 1) 岡澤和世. 「スウェーデンの図書館情報学教育：変革期の図書館情報学教育」, 『愛知淑徳大学論集』, 第20号, 1995, p.59-69.
- 2) 岡澤和世. 「スウェーデンの図書館活動：公共図書館と研究図書館を中心に」, 『愛知淑徳大学文学部論集』 No.23, 1998,

- p.71-91.
- 3) 岡澤和世, 「北欧4か国の図書館情報学教育の現状と課題」 *Journal of Library and Information Science*, vol.11, 1997, p.43-63.
 - 4) 2001年度『情報通信白書』総務省 p.25. 2001.
 - 5) Sigurdardóttir, Steinunn. *Vision of Iceland*. *Iceland Review*. 2001. p.120.
 - 6) Hauksdóttir, Auður, Ph. D. Assistant Professor, Chairman, Dept. of German and Nordic Languages, University of Iceland. の話から。
 - 7) Hannesdóttir, Sigrún Klara. “Bibliotekariutbildningen i Island.” *NORDINFO-nytte* 12, 4 (1989) : 25-31.
 - 8) Úlfar Bragason, Director, Sigurdur Nordal Instituteの話
 - 9) Karlsson, Gunnar. *Iceland's 1100 Years; History of a Marginal Society*, Mal og men ning, 2000. 418p
 - 10) ISLANDSKLUKKUR<Iceland Forkmusic>. MR-94, 1994. compact disc.
 - 11) The University of IcelandKatalog. 2001.
 - 12) Hannesdóttir, Sigrún Klara. “Library Education in Iceland : New Solution to Old Problems” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.53-90.
 - 13) Hannesdóttir, Sigrún Klara “Iceland ” in *Encyclopedia of Library History*. ed. Wayne A. Wiegand & Donald G. Davis, JR. Garland Publishing, Inc. 1994. p.267-268.
 - 14) Hannesdóttir, Sigrún Klara. “Bokasafraedingar utskrifadir fra Haskola Island 1964-1989.” *Bokasafnid* 14 (1990). [List of professional

- librarians who graduated from the University of Iceland, 1964-1989, with the name of their BA projects of theses. In Icelandic]
- 15) 岡沢憲美. 『スウェーデンの現代政治』 東京出版, 1992, p.120.
 - 16) Hannesdóttir, Sigrún Klara. “Framtíðarstefna í bokasafns- og upplýsingafæðidiv Haskóla Íslands.” *Bokasafid* 13 (1989) : [Conference paper on future policy for library education in Iceland].
 - 17) Guide and English Course Catalogue for Exchange and Foreign Student, Academic Year 2001-2002. Office for Academic Affairs Reykjavik. May 2000.
 - 18) Kärki, Ritta. “The Education of Library and Information Professionals in Finland” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.33-52
 - 19) Enmark, Romulo ; Selden, Lars. “the Education of Library and Information Professionals in Sweden” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.121-162.
 - 20) Spangen, Inger Cathrine. “The Education of Library and Information Professionals in Norway” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.91-120.
 - 21) Harbo, Ole. “The Education of Library and Information Professionals in Denmark” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.1-32.
 - 22) Haraldsson, Guómundur G., D. Phil., Professor of Organic Chemistry, University of Iceland / Institute of the
 - 23) Óskarsson, Óskar Eggert, International Coordinator, Office of International Education SOCRATES National Agency, University of Iceland の話
 - 24) Hannesdóttir, Sigrún Klara. “Education for librarianship: An Icelandic View.” *Education for Library and Information Services* : Australia 10, 2-3 (1993) : 42-9.
 - 25) Ole Pors, Niels. “The Changing Labour Market for [Library and] Information Professionals and Challenges for Nordic Library Education” in *Education for Librarianship in the Nordic Countries*, edited by Ole Harbo and Niels Ole Pors, Mansell Publishing Limited. 1998. p.163-191.